1　まえがき

農林工学系年報第10号は，本学系教職員の平成10年度１年間における活動状況の足跡であり，学系教職員の自己評価と将来への発展のための参考になることを意図して編集されたものであります。その内容は本学系教職員の研究・教育・管理運営・学会活動・国際活動の詳細を把握できるよう編集されたものであります。

研究面では全分野にわたり研究活動が活発に展開されており，学会賞の受賞が２件，中堅・若手教官を中心に科研費や受託研究なども含め研究が活発に展開されており，海外の研究者との研究交流や現地調査研究が着実に進展していることは評価に値します。特に本学系前川教授を世話人とする日本学術振興会日中拠点大学方式交流計画が軌道に乗り，本学系教官も多数参加し共同研究が実施され，シンポジウム開催など中国研究者との研究交流が一層活発に展開されています。

行・財政改革など社会は大きな転換期にあり，教育も例外ではありません。こうした流れの中で，理・工・農８研究科を基礎科学と応用科学を組み合わせた３研究科に統合，部局化する方向で概算要求を行うことになりました。既に農学研究科としては研究者リフレッシュ教育，留学生教育等，文部省と独自に農学研究科の改組案について折衝し，概算要求が認められてきた実績があり，進行中の改革にも先導的役割を果たしています。

本学系が中心となって要求中であった悲願の生物農林学系棟第１期工事（要求面積の約半分）が平成９年度で完成したので，スペース不足がやや緩和されたかに見えましたが，農学研究科として概算要求が認められた結果，新たな増員教員16名，院生100人分のスペース不足が続くことになり，現状では，新たな研究の展開が極めて困難で，第２期工事の速やかな着工が待たれます。

一方，国立大学の独立行政法人化の動きとそれに対する対応など本学系を取り巻く内外の研究・教育環境は大きく変化しつつありますが，こうした時にあたり，本年報を学内外の人々にご一読願い，農林工学系教職員の活動状況を正しく評価いただくとともに，忌憚のないご意見を頂き，将来への発展の糧としたいと願っております。

おわりに本年報の編集委員のご尽力と学系教職員のご協力に対し，心より感謝申し上げます。

平成12年１月

農林工学系長　天田　高白